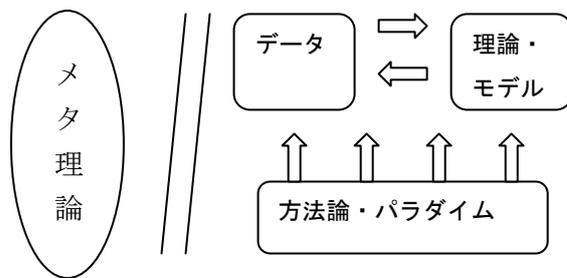


メタ理論とディスコース分析

鈴木 聡志 (Satoshi SUZUKI)
東京農業大学教職・学術情報課程

1. 理論とメタ理論

ある現象に興味を持ちそれについてデータを集める。データを分析することでデータを説明する仮のモデルが作られ、今度はそのモデルを検討するためにデータが集められ、モデルが修正される。こうしてデータとモデルの往復によりモデルが洗練され、説明力を増し将来の出来事について予測することもできるようになると、それは理論と呼ぶのにふさわしくなる。これが通常の研究の姿であるが、その背後には研究者達が暗黙のうちに前提とし、研究活動を暗黙のうちに規定しているものがあり、それが方法論ないしパラダイムと呼ばれる。



このようにデータと理論と方法論は密接に関連している。これに対してメタ理論はこれらとは違った次元に属し、様々な理論や方法論を比較検討するための視点を提供する（図参照）。理論とメタ理論をこのように理解した上で、ディスコース分析の位置づけを考えてみたい。

図 データ・理論・方法論・メタ理論の関係

2. ディスコース分析の位置

ディスコース分析の登場の背景には従来の心理学への不満があった。Wooffitt(2005)によると、1980年代のイギリスの社会心理学は、その実験的で認知主義的な方向性に不満を募らせ、従来の研究を批判し始めた。批判者達は、エスノメソドロジー、フォーコー派言説分析、レトリック研究、フェミニズム等の当時の多くの知的影響を反映した様々なアプローチを開始したという。そしてこうした多くのアプローチに共通する基盤がディスコースであることを示したのが Potter & Wetherell(1987)だった。これ以降、心理学批判者達はディスコース分析の周りに集結することになった。

こうした事情の背景に、20世紀の人文学における「言語論的転回」を指摘することができるだろう。この考えに従うなら、まずモノがあってそれに言葉が与えられるのではなく、まず言葉があってそれがモノを存在させる。心理学が対象とする「心」も同じである。私達の意識や経験があってそれに言葉が与えられるのではなく、まず言葉があってそれが私達の意識や経験を存在させる。これがもし事実なら、私達の内部に経験や考えがあってそれが言葉で表現されるのではなく、言葉が発せられると同時に、またはその結果、経験や考えが生まれる。従来の心理学的研究においては言葉は人の経験や考えを知るための手段であるが、ディスコース分析においては言葉の実際

の使われ方それ自体が研究のトピックなのである。

こうしてディスコース分析の研究者達に共通する問題意識として次の二点を指摘することができる。1) 従来の心理学の実験的、認知主義的傾向への不満とその代わりとなるアプローチの希求。2) 言葉を研究のトピックにすること。

心理学におけるディスコース分析は近年特に質的研究の方法としての地位を確立し、教科書の中で実験法や関連研究と並んで心理学的研究方法の一つとして扱われるようにさえなった (e.g., Eysenck, 2000)。しかしそれは独特な認識論と存在論を前提にしている。つまり認識論的には相対主義、存在論的には実在主義の論者もいるが概して相対主義である。従ってそれは独自の方法論を伴う心理学の方法である。よって先の図にあてはめるなら、ディスコース分析は方法論ではあるが心理学のメタ理論とは言えず、研究テーマの選択、データ収集法、データ分析法、結果の文章化、認識論、存在論等が一セットになった一つのアプローチと考えた方が適切だと思われる (鈴木, 2007 参照)。

3. Watanabe (2009) への疑問：一人称と二人称の区別は重要か

Watanabe(2009)は認識論と方法論の二つの軸によって作られた二次元平面上にこれまでの心理学の諸潮流を位置づけた。認識論の軸では自己と他者が区別されるが、この論文ではさらにメタ心理学的レベルとして一人称、二人称、三人称の区別が導入され、他者が親しい他者 (二人称) と見知らぬ他者 (三人称) に分けられる。

理論や方法論はメタ理論から一方的に論評されるようであるが、逆方向の論評も可能かもしれないので、ディスコース分析ないし社会構成主義の立場からメタ心理学的レベルの区別に疑問を投げかけてみたい。人は最初心を持たないで生まれる。しかし心を持つ人達から心を持つ者として扱われることによって次第に心を持つようになる。人はまず世界に満ちている記号 (その代表が言葉) を知る必要があり、記号の意味を知り記号を操作することができるようになった後で、いわゆる内面や自己ができる。従って自己ができる以前に、記号を使う親しい他者がいる。この二者が異なるように見えるのは、個人の自己ができてからである。よって、自己/他者の区別よりも、自己および記号体系を共有する他者/記号体系を共有しない他者の区別が重要と思われる。もしこれが正しいなら、一人称と二人称の区別はあまり重要ではない。

文献

Eysenck, M. (2000) *Psychology: A student's handbook*. Psychology Press. (山内光哉 (監修) (2008) 『アイゼンク教授の心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版)

Potter, J. & Wetherell, M. (1987) *Discourse and social psychology: Beyond attitude and behaviour*. London: Sage.

鈴木聡志 (2007) 会話分析・ディスコース分析 新曜社

Watanabe, T. (2009) Metascientific foundations for pluralism in psychology. *New Ideas in Psychology*, in press.

Wooffitt, R. (2005) *Conversation analysis and discourse analysis: A comparative and critical introduction*. London: Sage.